The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クリシュナ・バルデーオ・ヴァイド著「前世の話だ」
Author(s)	ヴァイド, クリシュナ・バルデーオ; 長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2021, 20, p. 47-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/86922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

クリシュナ・バルデーオ・ヴァイド著

「前世の話だ」

長崎 広子

解題

本翻訳作品「前世の話だ」はヒンディー作家クリシュナ・バルデーオ・ヴァイド（कृष्ण बलदेव वैद）の短編集『菩薩の女房　बोधिसत्त्व की बीवी』（Delhi: National Publishing House, 2001）所収の पिछले जन्म की बात है の日本語訳である。

この作品は、先の読めない物語の進行と入り組んだ構成で、冒頭から読者を戸惑わせる。テーマは輪廻転生で、「私」はアートマンつまり「我」であり、前世の記憶を持っている。転生を繰り替えしてもアートマンは不滅であるとするヒンドゥー教の思想を基盤としている。現世では経済的に何不自由なく暮らす「私」が家族を捨てて遁世した前世を回想しており、遁世するに至った内面の葛藤がくどいまでに記されている。「絡みつくような」と形容するしかない独特の語りと終止符までが極端に長く仮定の多い文章は、内面の不安定さと不合理を表現しているといえよう。さらにこの小説部分以外に、主人公である「私」が物語を語る途中に、文学に関わる登場人物（作者と批評家と一般読者と天の声と編集者）の行動や心理が擬人化され、ト書きとともにそれらがセリフを発して互いに作品について対話する。そこにときには「私」も加わり、それらに影響を受けながら「私」はこの小説を彼らに語り終える。この作品を、小説と戯曲の融合、あるいは「私」の語りをも含めて全体を戯曲ととらえるか、はたまた戯曲を装った小説ととるかは読者の判断に委ねられよう。

「私」は著者の一人称の語りではなく、著者の作り出した小説の登場人物であり、独立した自我を有する。著者をはじめとするほかの登場人物は、小説が完成し読まれるうえで必要不可欠な存在ではあるが、「私」は彼らの反応や干渉に振り回されることに反発している。それらの登場人物と著者との確執はさらに顕著で、著者は批評家や読者から批判されるのだが、批評家はすべての者からもっとも嫌悪される存在として描かれている。なお、著者は自身の言いなりにならない「私」に対しても手を焼いているが、大概は鷹揚な態度で「私」の好きにさせており、これらの登場人物のト書きとセリフは、著者ヴァイドの創作活動における経験に基づく描写と考える

と興味深い。

前世における行為で生じる業を起因とする輪廻転生はヒンドゥー教の代表的思想であり、「私」の語りはそこに深遠な意味を求めているように描きだされているが、結末は因果応報に帰着するお決まりのもので、実に陳腐な物語になってしまったように感じられるかもしれない。だが、本作品は哲学的な問答を追求するといった高尚なものではなく、風刺小説であったことが最後の結末で明らかになるのだ。それを理解して原文をよく観察すると、全体を通じて、ヒンドゥー教の哲学や聖者に対する世間一般の崇敬が嘲弄的に戯画化されていることが分かる。セリフや小説部分にふんだんに散りばめられた皮肉や、本来ならばヒンドゥー教の思想を語るうえでは古典語であるサンスクリットの語彙を使うはずであるが、イスラム教徒が多く用いるウルドゥー語の語彙を多用するなど、この作品には痛烈な風刺が込められている。翻訳作品においてそれらの語彙の差や、痛烈な嫌味やおかしさが忠実に反映されていないのは、翻訳者のスキルの問題として理解されたい。いずれにしても本作品は、ヒンディー文学として極めて異例の作品であり、異端のヒンディー作家クリシュナ・バルデーオ・ヴァイドの異才がいかんなく発揮されている。

なお、訳出にあたって、ウルドゥー語のいくつかの言い回しについては、松村耕光大阪大学名誉教授から、本作品で独特のヒンディー語の語彙や用法については、ヴェーダ・プラカーシュ・スィング大阪大学特任教員から有益な助言をいただいた。この場を借りて深くお礼を申し上げる。

使用テキスト

Kṛṣṇa Baldev Vaid, “Pichale janam kī bāt hai”, *Bodhisattva kī bīvī*, New Delhi: National Publishing House, 2001, pp. 81-94.

前世の話だ

クリシュナ・バルデーオ・ヴァイド著

前世の話だ。ある日の夕方のこと、散歩をしながら私は、家や世俗のしがらみから遠く離れた見知らぬ場所にやってきた。そこから、家や家族や世俗に戻ることは不可能とも不必要とも思われた。おそらくその場所は…

先に進む前に、少し説明の必要があると思われる。私はここでこう言いたい、業や転生や輪廻などを私は信じていないが、信じていないわけでもないと。ではどういうことなのか？ああ私の思いに何か良い名称を与えることができれば良いのだが。もしかしたら私には好奇心があるだけなのかもしれない。信じたいのかもしれないが、勇気はないのだろう。迷信と言われるのが恐くてこう言って納得しているのだ、業や転生や輪廻などを信じていないと。私は書物から…

一般読者の抗議	小説を語りだす前に、結局お前はどちらなのか心に決めておくべきじゃないのか？
天の声	哀れな奴に話をさせてやりなさい。
「私」の返答	私は哀れではない。
著者の干渉	すばらしい！
批評家の命令	お前は黙れ！
一般読者の嘆願	何がどうなっているのだ！
著者の叫び	ああ、わたしにも分からない！
批評家の叱責	お前は黙っていられないのか！
著者の報復	お前は何様のつもりで私に命令するのだ！お前が黙れ！なぜここに現れたのか？お前をここに誰が来させてやったと思っているのだ？お前は文学と何の関わりがあるというのだ？出ていかないのなら、今ここで身ぐるみはがすぞ！
一般読者の悲鳴	何がどうなっているのだ！

著者の返答　　批評家をこらしめただけだ。
天の声　　批評家は尻尾を巻いて逃げていった！
一般読者の声　　屑が消えてせいせいした。
「私」の願い　　もう私を先に行かせてくれ。
著者の許可　　我が息子よ、先に進みなさい。
「私」のクレーム　　私はお前の息子ではない！
著者の訂正　　お前がわたしの父だとしても、先に進みなさい！

ああ、そうだった。私は物語を中断して説明しようとしていたのだ。私はいくつかの書物から業と転生と輪廻についての洞察を拾い集めるという報われない努力もしたという話をしていたのだった。慣習上これは著者がすべきことであったが、あのろくでなしはとても怠慢で、いつも熟考せずに書きはじめ、推敲は後ですると言う。ああ、それで書物から私は断片的な洞察を見つけたのだが、疑念が消えることはなかった。すべての疑念が何かの洞察によって消えはしないことを知っている。すべての疑念が消えた後の洞察の闇を推測する洞察のなかで分かったことは、すべての疑念が消えれば、物語や何かを語る必要さえなくなるということだ。だがこれは別の問題で、この小説で扱わない方がよいだろう。しかし、私が探したすべての書物には、おそらく洞察が欠けていたのだとここで記しておこう。それらの題名を列挙するつもりはない、私の著者の名誉に傷がつくから。

一般読者の質問　　お前は自分の著者をどうして無視しないのか？
「私」の返答　　できるはずがない。あのバカ野郎はいつも私につきまとっているのだから。
著者の（小）声　　先に進め！

ああ、それで私が探していたその洞察は、サンスクリット語の難解な書物のなかに見つかるかもしれないと言おうとしていたのだ。しかし私は、サンスクリット語を知らない。私の著者も知らない。習得する努力を二人ともしてはみたが、老いぼれの手習いではおそらくサンスクリット語は身に

つかない。たとえほかの言語を習得できたとしても。転生があると仮定するなら、いつか次に生まれ変わったときにサンスクリット語を必ず習うことと、生まれるやいなや学びはじめることを約束しよう。しかし転生を信じていても、おそらくそれを約束するのは困難で無駄でもある。なぜならば、業の原則によって、私に来世はなく、今生ですぐに解脱を得られるかもしれないからだ——私はこのわずかな可能性を喜ぶべきで、実際にうきうきしている。それに来世では、人の生を得ても、サンスクリット語を学ぶことのできないようなどこかほかの国や困窮した状況で生まれる可能性もある。そもそも、来世でも今生で誓ったことを覚えているとどうして言えようか。それに覚えていたとしても、結局仕方がないだろう。聖典はこう言っている——誓いと誓約は、とどのつまり関連していないのだと。いや、これについても私は誤って聞いた可能性がある。それに聖典が首尾一貫しているはずがない。矛盾したことを語っているとよく耳にする。法や業や転生などについてのあらゆる疑問に対する答えを『バガヴァッド・ギーター』の中に見出す人もいる。私はそういう人間ではない。洞察を得るために師を頼る人もいるが、私はそれもできない。あらゆる師についていくつかの欠点が目についてしまうからだ。それというのも、欠点のない師を得られるのは盲人しかいないと思っているからだ。ああ、私が盲人であればよかったのに。哲学的なある友人は、サンスクリット学者ではないもののサンスクリット語に造詣が深く、自由に思索する。私の戸惑いが消え、私が信じたり信じなかったりするように、業と転生などについて説明してほしいと時々思う。しかし彼はそれをせずに、私をえぐるだろうことは分かっている。

一般読者の質問　**お前は随筆を書いているのか、小説を語っているのか？**
「私」の返答　**その質問は私の著者に聞け。**
一般読者の文　**そういうからくりは、ほかのところでやってくれ。**
著者の困惑　**変わった殿方だ。**
一般読者の困惑　**男だけじゃないだろ。**
「私」の干渉　**私の著者は豚野郎だ。読者に女がいると思っていない。**

著者の承認　わたしが悪かった。さあ先に進め。
「私」の質問　その前に、教えてくれ。転生を信じずに私はこの物語で先に進んでいいのか、この物語を先に進めてよいのか。
著者の提案　そんな下らない質問はそこまでにしておけ。
「私」の固執　答えろよ！
著者の拒否　答えなんてない！
「私」の脅し　じゃあ物語は進まないだろう。
編集者の電報　原稿をください！
著者の哀願　お前はこの物語を先に進めることができる。信じる、信じないなど、ごちゃごちゃ考えるな。小説を語れ。誠実に、まるで…
「私」の怒鳴り声　もういい、やめろ。誠実さなどを持ち出すな。さんざん悪行を働きながら、今さら善人面するつもりか！
一般読者の声　ごもっとも。
著者の不平　お前たちは二人ともなぜわたしの敵なのだ？
一般読者の命令　自分で自分を悪人にしたてているくせに。
批評家の声　ごもっとも。
「私」の当惑　こいつはまた現れた。
一般読者の声　わたしを、この友人たちから救いだしてくれ。
天の声　先に進め。
著者の賛成（低く）　ああ、もう先に進め。

ああ、それでこう言っていたのだ、前世の話だ…

一般読者の指示　繰り返しはもういい、先に進め。
「私」の反論　お前は私にけちばかりつける。
著者の干渉　わたしの読者に怒鳴るな。
一般読者の攻撃　すべて悪いのはお前だ！
天の声　読者殿のおっしゃるとおり。
一般読者の修正　女性読者もいる。
著者の催促　もう先に進め！

ああ、それで私は話そうとしていたのだ、朝と晩に散歩に出かけるという悪い癖が前世の私にはあって、現世でもそうで、おそらく前世の前にいつか生まれたときにもそうだったのだろう、おそらく現世の後の未来の生でもそうなるだろう。

前世で散歩していたときにはいつも、すべての世俗のしがらみを断ち切ろうと想像しておそらく戯れていた。まるで変な大人が自分の子供のおもちゃで遊びつづけるように。

今生で散歩するときにも、私は世俗のしがらみをガタガタ鳴らしている。ガタガタいうときに聞こえる音色が私には心地よいからだ。

前世で私は徒歩で散歩していた。何度か裸足でも。

今生では散歩のために専用の車を一台所有している。散歩のために運転手を雇い、散歩のために女中を置いている。彼女たちは散歩のあいだ私の心と身体を癒してくれる——歌ったり、さすったり、温めたり——。

一般読者の叫び　悪ふざけはやめろ。
「私」の弁明　どこの間抜けがふざけているって？私は楽しませてやっているのだ。
著者の忠告　控えめにやれ。
「私」の反撃　私は登場人物だ、操り人形じゃない。
天の声　そのとおり。

ああ、それで前世でその夕方に散歩をしながらたどり着いた見知らぬ場所は、おそらく私の心の奥の洞窟から現れて私の前で具現化したものだったのだろう。

前世では、心のなかに無数の洞穴が出現し、それらの中に無数の感情、考え、行為、歪み、場所が生じた。それらはしばしばそこから外に出てきて私を驚かせるのだった——ときには夢として、ときには私の意思として、ときには散歩中の景色や啓示や出来事として。

今生で私の心の奥にはひとつの洞窟もなく、自分で知らない感情や考え

や行為や歪みや場所などはまったくない。今生で私の心の奥には輝く庭がひとつあって、そこの花と鳥の名と特徴を何もかも知っている。今生では散歩中に私を驚かせるようなものは何もない。

あの夕方のあの見知らぬ場所を、私はそのときも説明できなかったし、今もできない。

前世と今生にはこんなに大きな違いもある――前世では途中に、私に説明できない、あるいは説明からはずれた場所が現れたものだった。もしかしたら夢の中でそれらを見せられているのではないか、私は夢幻的な状態に陥ったのではないだろうかと思っていた。しかし今生では、説明できなかったり、夢の中なのか夢幻的な状態に陥ったのかと疑ったりするような場所はこれまで一度も現れたことがない。

一般読者の質問　君は前世の方が幸せだったのか？それとも今の方が幸せなのか？
「私」の返答　幸せかというなら、おそらくそのときも今もそうではない。
一般読者の疑念　これを答えたのは、おそらく君の著者だろう。
天の声　その通り。
著者の懇願（小声で）　先に進め。

ああ、それで前世では、もしかしたら夢の中で家や家族などの場所に行ったのかもしれないと疑念を抱いた。

一般読者の抗議　さっきはその場所が君の心の洞穴から出現したのではないかと疑っていたのに、今は別の疑いを持ち出すのか？何が真相だ？
「私」の戸惑い　君は読者なのか、それとも取調官なのか？
著者の懇願（小声で）　争うな、先に進め。

ああ、それで私は頭を振って、足を一度踏みならし、まず片方の掌に別の

手の爪を突きたて、次にその手に最初の手の爪を突きたて、目を両手でこすって、やっと安心したのだった。私は目覚めていたし夢の中にいるわけではなかった。

　そして突然私の心に、自分が想像もしなかった考えが浮かんできた。そのすべてを今では覚えていない....

一般読者の声　　ご立派！
著者の抵抗　　いちいち口をはさむな、哀れな奴に。
「私」の抵抗　　私は哀れではない。
批評家の声　　自分の著者に向かってその言い方はなんだ！
著者の叱責　　お前は出て行け、さもないとぶちのめすぞ。
天の声　　どうなっているのだ！
著者の叫び　　こいつを天界に連れ帰ってくれ！

ああ、それで私はこう話していたのだ。それらの考えを私は覚えていないが、その骨子はこうだった——もし私がすべてを、何もかも忘れてこの場所で消えてしまったら...？

　その「たら」のあとの偉大なる空（くう）の酩いから、私はいまだに醒めきっていない。

一般読者の疑い　　わたしは認めない。
批評家の同意　　わたしも認めない。
一般読者（すぐさま）　　じゃあ、わたしは認める。
「私」の攻撃、批評家に対して　　また何か言ってみやがれ、たわけが！
著者の攻撃、批評家に対して　　ここから出て行け！

ああ、それでここでこれだけは言っておこう、その夕方より以前にも私はその「たら」の可能性を何千回となくひねくり回してみたが、家に座っていただけで、そもそもどんな場所にも行くことはなかった。感受性豊かな世俗の人間のように、自分も狭い世界の中心にいると錯覚するために何度

も考えたのだった――もしお前が今日死んだら、家族はどうなるのか！その度に心の奥が保証してくれる――もしお前が今日死ねば、お前の家族は破滅するだろう！この保証によって、限りない満足と精神力と自分の家や家族や世俗のすべての問題に立ち向かう力を得ることはあっても、あの夕方よりも前には、この類(たぐい)の問が偉大なる空(くう)を見せてくれることはなかった。

ああ、あの偉大なる空(くう)について説明できたなら！

著者の動揺　**わたしが必要だと思っていれば、その偉大なる空(くう)をお前に説明させていただろう。**
「私」の質問　**そうすべきだとどうして思わなかったのだ？**
著者の返答　**お前がそれを語る必要はないとわたしは思っている。**
私の強情　**なぜ必要ないのだ？**
著者の不機嫌　**つっかかるな、先に進め。**

なんて怒りっぽい著者の餌食になってしまったことだろう！仕方がない！ああそれで、私はその偉大なる空(くう)について説明はできなくても、それのお陰で空想の乗物に乗って自分の家に行くことができたことだけは分かっている。家や家族などのもとから消滅する前に、私は最後に一目見ておきたかったからだ。

我家が輝いているのが見えた。妻は隅に座って『ヨーガ・ヴァシシュタ』の遊戯のエピソードを読んでいた。その顔は安心した様子で輝いていた。息子はテレビの前に座ってゆらゆらしていた。娘は人形に諭し聞かせていた「いいバンノー、大きくなったら結婚しちゃだめよ！」父は水煙管をブクブクやり、母は父に小言を言っていた。「一晩中咳をして、少しは気をつけなさいよ！」すっかり夜は更けていた。私が散歩から戻らないことを誰も気にしていなかった。――私はいつも時間通りに帰宅したし、私はとても時間に正確で、私が食べたり飲んだり寝たり散歩に出かけたり帰宅したり、良いことであろうとなかろうとすべての行動において時間は厳格に守られていたので、家族は時刻を私の日課で知ることができたほどに、私は

習慣に縛られていた。

一般読者の好奇心　　家に時計は何個(いくつ)あったのだ？
「私」の苛立ち　　つまらない質問を！
一般読者の苛立ち　　まともな質問だ！
著者の激高　　やめろ、こんな争いは！
「私」の嫌味　　これ以上読者に媚びへつらってみろ、ただじゃおかない！
著者の願い（手を合わせて）　　お願いだから先に進め！

ああ、それで私はかなりの時間を家にとどまって待ちつづけた。誰かがほかの誰かに、私がまだ散歩から戻らないのはなぜか、何か事故に巻き込まれたのではないか、探しに行くべきではないかと尋ねるだろう。しかし私が見たのは、誰も私の不在に注意を払わず、全ての者は食事をとろうとしている様子だった。ありがたいことに、そこにいながら私はそこにいなかった――あなた方は覚えているだろう、私が空想の乗り物でそこに行ったことを。もし私が本当にそこにいたなら、怒り狂っていたか、欲求に負けてしまったかもしれない。私はすぐに乗り物を空飛ぶ寝台に変えて、家や家族や世俗から解放してくれるあの場所に向った。

そして今では、最期までその場所に埋もれていたいというみじめな気持ちが、強い決心に変わりはじめたのだった。

著者の反論　　「場所」を少し使いすぎている。
「私」の問　　じゃあどうすればいいのだ？
著者の回答　　減らせ。
「私」の不満　　お前を喜ばせるのは至難の業だ。
天の声　　その通り。
「私」の願い（天に向かって）　　こいつを天界に連れ帰ってくれ！
著者の叫び声　　そうしたらこの小説はどうなるのだ！
批評家の声　　これは小説じゃない！

一般読者の称賛　でも、面白い。
著者の驚き　　こいつは全く信用できない！
「私」の不平　　お前を喜ばせるのは至難の業だ！
著者の命令（低い声で）　もう先に進め！

ああ、それで自分に対する家族の無関心を嘆くかわりに、私は喜びはじめたのだった。もし私がいないことで家族が慌てふためく様子を空想の目が見せていたなら、彼らから自由になることは難しかっただろう。私の空想は私が見たいものを見せたのかもしれないという漠然とした考えが浮かんだのだが、この考えを私は自分の心の奥に押しとどめておかなかった。その前世で、私は自分の空想にゆるぎない信頼を置いていたため、空想の車つまり空飛ぶ寝台に乗ってもう一度友人に会いに行こう、そして何だかんだ言いながら仕事を続けた職場を見に行こうと思ったのかもしれない。だが幸運にも、この願いはさして強くなかった。友人といっても実のところは敵でしかなかったし、仕事に対して実際には何の愛着も持っていなかった。それによって心の中の欲求が満たされることはなく、それは生活の糧や家族を養う手段にすぎなかった。仕事を辞めるためなら何もかも捨てる覚悟があった。自分の気持ちが最後にこのように展開したことに私は驚いた。自分でもその意図をはかりかねた。しかし目をつむって自分自身に気づかせたのだった――私が死ぬことで、つまり消えても、誰にも何の影響も与えない、すべての活動は滞りなく続くだろう、私がいてもいなくても同じなのだということを、少し死んでみて私は確認したのだと。

「私」の呼びかけ　どなたか反論は？
一般読者の驚き　何という間抜けだ！馬鹿を呼びやがって。
批評家の怒り　　わたしを馬鹿と呼ぶなら、痛い目に合わせるぞ。
著者の修正　　牡牛を馬鹿と呼ぶな！
批評家の呪い　　軽蔑する！
天の声　　嘘つきが！
著者の歌　　*進め，進め，若者よ♪*

「私」のぼやき　ああ煩わしい。

ああ、それで私はすべての迷いと重荷を枯葉のように落としてゆき、解放感が向日葵のように花開くのを見たが、疑念と不安はいまだに私を苛んでいた——何を食べるのか、どこで寝るのか、山のような時間をどうやって過ごすのか、病気になったら誰のために苦しむのか、腹が立ったら誰に怒りをぶつければいいのか、死んだら誰が悼んでくれるのか？そのとき、心の奥から低い声が聞こえてきた——ついに神の情けか何かの善行の結果として鎖がひとりでに壊れたのに、お前は自分の自由をもう一度つなぎ留めたいのか。愚かなことはやめろ、不安を乗り越えろ、覚悟を決めろ。

この葛藤は可笑しくもあり、そこに怒りも覚えた。どちらの感情も押し殺して私はその声の真理を呪文として唱えはじめた。その朗誦によって得られた力を胸に抱き、その場所の周囲を、まるで無冠の王が壁のない自分の宮殿を視察するように歩きはじめた。

そのとき、人生ではじめて私は至福の息を吸ったのだった。

「私」の批判　この文章は醜いし、嘘でもある。おそらく嘘なので醜いのだ。あるいは醜いので嘘なのだ。
著者の驚き　お前がこれほど感受性が強いとは知らなかった。
「私」の要求　この文章を修正するのに手を貸せ。
著者の拒否　わたしはこれを変更したくない。なぜならば、この文章がお前の性格に合っていると思うからだ。
「私」の苛立ち　私の性格はこんなに単純ではない。
著者の警告　わたしがお前の父であることを忘れるな。
「私」の一刀両断　私がお前の息子であることを忘れるな。
著者の命令　では父の命令に従いなさい。先に進め。

ああ、それで私は至福の息を吸い、腕を枕にして頭をのせ、そこに横たわった。あっという間にかつて味わったことのない深い甘美な眠りに落ちた（文章が退屈になっていると思う。私の不満は著者に影響を与えなかった。

性格に合った古めかしい味気ない言葉を私が使うべきだと、著者は突然錯覚したようだ)。眠っているあいだに私は同じ夢を何度も見ていた。それによって私の睡眠はさらに甘美で深くなっていった。その夢を今は覚えていない。覚えていたとしても、私はそれを説明できないだろう。語られることを夢が警戒するのは分かっている。語り手が自分の都合や論理や決定や情景や恐れを補強するために、論理性と無秩序を捻じ曲げ、それらを利用しようとしていると、夢は思っているのだ。だから夢は抗いはじめる。そして語り手は、夢のその抵抗すら語りの中に納めることはできない。

著者の冗談　**どうだ、嬉しいだろう。再び自分の言葉が息を吹き返したではないか。**
「私」の非難　**お前には信念がないのか？**
著者の回答　***ミールの信仰について問うているのか…***
「私」の苛立ち　**やめろ、やめろ、詩人ミールとお前など、比べものにならない。**

ああ、それでどれほどの時間が過ぎたのか分からないが、眠りから覚めると私は解放されたと思った。起こったことは善いことで、これから起こることも善いことだろう。心の奥を探してみると、そこには何の疑いも不安要素も後悔も罪悪感のひとかけらも見つからなかった。中からまた声が聞こえはじめた――お前がいなくても、すべての活動は滞りなく続くだろう、バラ園のすべての仕事はいつもどおり続くだろう、お前の愛しい人はお前がいないと悲しむだろうが、それでもやっていけるだろう、お前の両親が死ねば、妻は誠実な金持ちの恋人を見つけるだろう、とても愛情をかけてお前の子供たちを育て、子供たちが彼の実子でないことを誰も気づかないだろう、子供たちは大きくなるにつれてお前を忘れていくだろう、妻は努力してもお前の姿を思い出の中に大切にとどめておくことはできないだろう、そしてお前が彼女の前に現れたとしても、彼女がお前だと気づかない日がいつか訪れるだろう。

声が今度は予言に変わった。しかしそれを聞いても次の疑念が生じるこ

とはなかった――それが私の願いを代弁しているのか、私は自分の義務から逃げようとしており、その根拠のない声を言い訳にして自分の内奥の狡猾さを称賛に変えようとしているのかという疑念は生じなかった。

一般読者の反対　今さら内奥の声を誰が聞くというのか？
著者の主張　わたしが聞いている。
「私」の声　私は認めない。
著者の苛立ち　じゃあ認めるな！だが先に進め！
「私」の条件　もう最後まで私を止めるなよ、いいか？
批評家の威嚇　わたしは止めるぞ！
天の声　こいつのことは気にするな！
著者の呼びかけ　先に進め！
「私」のぼやき　ああ煩わしい。

ああ、それで奥の声が静まったとき、私は寝転がりながら二本の輝く足を見ると起き上がり、自分の額をそれにつけたのだった。全身に電光のようなものが瞬いて私は浄化された。頭をもたげて見上げると、ひとりの苦行者と目が合った。優しい微笑みが白い髭の奥から私に降り注がれ、片手は私の頭をなで、穏やかな声が聞こえた――起きなさい、幼な子よ。私たちはとても遠くに行かなければならない！

私は立ち上がってその苦行者に従った。

それよりも前に、私はどんな賢者の足にも額づいたことはなかった。以前はいつも聖者や修行者を疑いの目で見ていた。彼らのインチキの話は、私が無信心であることにも一理あると保証してくれた。だが両親や妻からは信仰や信心の説教を聞かなければならず、ときには幼い子供たちまでがそこに加わった。「ねぇお父さん、お母さんと一緒にどうしてお寺に行かないの？お祖父（じい）ちゃんとお祖母（ばあ）ちゃんみたいに、どうしてお経をあげないの？断食とかどうしてしないの？どうして無神論者なの？無神論者ってどういう意味なの？」

子供たちの話を聞くと、妻と両親が子供の小さな肩に説教という鉄砲を

のせて私に向けて撃っているのだと感じた。おそらく彼らはみな正しくて私が間違っているのだと思ったが、こんな一般論が少し刺さったくらいでは、私の考え方や行動が変わることはなかった！

だが、その苦行者の後ろを歩きながら、私はこれらすべてを思い出していたし考えてもいた。すべてを捨てて私が賢者に付き従ったのは、彼ら全員の説教の影響だったのかもしれない——解脱を求め、法と業と愛欲と実利の束縛を一発で断ち切ったのは。こう考えて、歪んだ安心感を得た一方で、甘美で衰弱させる沈鬱にも襲われた。実のところ私の足は僅かにふらつき、それをその苦行者は神通力によって悟ったのだろう。彼が突然立ち止まったので、私は彼の背にぶつかったのだった。苦行者が振り向いて私を見ると、まるで彼の光線が私の身体と心を燃やしているようでもあり生き返らせているようでもあった。

その瞬間のすぐあとの展開をまったく記憶していない。忘却の砂に埋もれた出来事を探すという報われない努力はしてみた。ある日の夜に、突然その場面が私の記憶のなかで閃くこともあるかもしれないという期待はある。おそらくその苦行者さまが無力な私を救うために少しのあいだ私を気絶させたのだろうと思っている。おそらくその時間こそが私にとって本当に自由なときであったと思う。

その次の展開は記憶にある。そこでは私が光り輝く聖者になっていた。顎鬚は長く濃く白かった。目は大麻のせいでぎらぎらしていた。足から火の粉が噴き出し、周りには信者が群がっていた。そして時々夜になると、自分の中から何かの声が煙となって湧き上がるのを感じていた。私は泣き出し、信者たちは私に何が起こったのかを知ることはできなかった。

今もし読者がこれを望んでいるのなら——私が泣いた理由を述べるか、聖者の奇跡の話を聞かせるか、性愛の秘密をあかすか、妻が子供たちと新しい夫を連れて拝謁するために私の庵を訪れ、私の足に触れて恩寵を求め、私が彼らだと気づいても彼らは私に気づかず、私は恩寵を与えるではなくじっと妻を見つづけ、よろめいて再び立ち直り、微笑みながら「帰りなさい、ご母堂よ。安寧あれ。子供たちは幸せである。お前の二番目の夫は最後までお前と一緒にいるだろう」と言うようなクライマックスを与えると、

もし読者がこのようなことを私に期待しているとすれば失望するだろう！

一般読者の苦痛　**お前はわたしをこんなに愚か者だと、どうして考えているのか？**
「私」の弁明　**「私」は著者が私に言わせることを語っているにすぎない。**
一般読者の修正　**しかし自立する必要があるだろう。お前は操り人形なのか？**
批評家の干渉　**こいつは著者じゃない、暴君だ！**
著者の叱責　**お前はまた現れた！何という恥知らずか！**
一般読者の忠告　**小説を終わらせろ！争いをやめろ！**
天の声　**こいつの話を聞け！**

ああ、それで私はこの小説を、前世の核心的な出来事ではなく、今生のきわめて簡潔な描写に続けてひとつの素朴な疑問をもって終わらせたいと思う。

一般読者の叫び　**それはないだろう！**

ああ、それで今生において私は聖者ではなく、努力家でインチキな億万長者だ。金庫は汚い金であふれ、汚い商売で頭の先まで浸りきっている。家族は贅沢三昧に暮らし、世間で私はいつも噂され、下女たちは私を拝みつづけている。何ひとつ不自由はない。

夕方の散歩の際に下女たちが私を撫でていると――今は散歩に一人で歩いて出かけることはないことを覚えておいてほしい――前世のあの夕方をいつも思い出す。散歩をしながら家や家族や世俗のしがらみから遠く離れていたときを。しかし今は、自分の家や家族や世を捨てるという考えが浮かぶことはまったくない。

すべては順調だが、ただひとつ悩みがある――妻が私を愛しておらず、

私の汚らわしい行為を嫌っており、そのうち何もかも捨てて救済庵に行くといって昼も夜も繰り返し叱責するのだ。

この救済庵は、私が前世で創設したものだ。

もしかしたら、この妻も私が前世で捨てたあの妻なのかもしれないとしばしば疑っている。

一般読者の失望　お前がこの小説にこんなに古めかしい結末を与えるとは思っていなかった。
著者の激励　読者よ、まだ終わっていない。
一般読者の質問　まだほかに何が残っているのか？
「私」の返答　私の素朴な疑問。
一般読者の叫び　それはないだろう！

ああ、それで私の疑問はこうだ——前世の業の報いとして私は得なければならなかったのか、汚い財産、汚い職業、美しい下女、欲求不満の妻から浴びせられるどす黒い叱責を？学者さま、どうかお答えください！

ヴァイド氏との思い出

ヒンディー作家クリシュナ・バルデーオ・ヴァイド（1927-2020）が亡くなったのは、新型コロナ感染症が流行する兆しを見せた 2020 年の 2 月だった。ネットのニュースでその死を知ったときには、ヒンディー文学の一時代が終わったという思いを抱いた。一般には高齢のヴァイド氏がアメリカで存命であったことに驚かれたのかもしれない。氏とは翻訳者として出会ってから交流があったこともあり、晩年の一時期を知る者として、追悼の意味をこめて氏との思い出をここに記したい。

私が作家クリシュナ・バルデーオ・ヴァイドを知ったのは、大阪外国語大学の大学院で現代ヒンディー文学を学んでいたときだった。ヒンディー文学の授業で講読した作品には小説というよりも「お話」といった方がよいようなものが多かったが、彼の小説は心理描写の掘り下げ方ひとつをとっても小説と呼ぶにふさわしい作品であり、強く印象に残った。インドに留学したときには、現地で買えばよいのに、彼の小説を一冊スーツケースに入れて持っていったほどで、文学協会（साहित्य अकादेमी）が主催する作家が自身の作品を読み聞かせる催し（1997 年に 9 月 17 日）[i]でヴァイド氏本人が登壇すると新聞で知ったときには、興奮しながらそこを訪れた。最前列にはヒンディー文学の作家たちが座っていたことが今でも鮮明に思い出される。『ビールーの少年時代』や『過ぎ去りし日々』などの代表作の一部を朗読しそれを解説するヴァイド氏の姿に感激し、会の終了後に舞台を降りてほかの作家たちと話す氏に近づき、作品のファンであると名乗ったほどであった。

それから氏に再開したのは、彼の初期代表作 *उसका बचपन* を大同生命国際文化基金から翻訳出版するため、デリーのお宅に伺ったときだった [ii]。たくさんの本に囲まれ美しい絵が壁に飾られたヴァサント・ヴィハールのフラットでヴァイド氏はチャンパー夫人と暮らしていた。とても気さくな方で、すでにその頃は７０代後半になっていたが、執筆活動を精力的に続けていた。作家の小田実はアメリカにフルブライト奨学金で留学した時代の友人で、ここにも遊びに来るのだというような話を楽しそうに聞かせてく

れた。その後も私が研究調査のために毎年数回インドを訪れた際には、日本に帰国する前に必ずデリーの国際空港に近いそのフラットで歓談するようになった。

ヴァイド氏は多くの作家仲間や友人にいつも囲まれ、とても慕われていた。私が訪れたときにはいつも詩人のアショーク・ヴァージペーイーがお茶を飲んでいた。出版記念パーティーも盛大に開かれ、そこで著名なヒンディー作家に会う機会を得られたことは私にとって得難い思い出である。ヒンディー女流作家のクリシュナー・ソーブティーと何度か会い、自宅でのインタビューが実現できたのも、氏の仲介があったからだった。ヴァイド氏と会う約束をしていた日にヒンディー作家のカムレーシュワルが亡くなったときには、一緒に火葬場に向かった。氏がマスコミのインタビューに応じる横で、ぼうぼうと燃える薪から舞い上がる灰を私は全身にかぶっていた。学生時代に日本で作品を読んだヒンディー作家カムレーシュワルに会うことはなかったが、不思議な縁で彼の最後のサンスカーラに立ち会えたことは感慨深かった。

ヴァイド氏の代表的な作品のいくつかは英語やフランス語などにも翻訳され、インド国内に限らず海外でも評価が高い。誕生日と新作の発表をかねたパーティーがデリーで盛大に催されるなど、充実した老後を送っていた。だが、2009 年にデリー・ヒンディー協会のシャラーカー賞の受賞が満場一致で決まっていたにもかかわらず、作品に猥褻な描写があると州議会議員プルショッタム・ゴーヤルから指摘があったため、デリーの州（連邦直轄領）首相シーラー・ディークシトが再検討するように指示したことで、受賞が見送られるという出来事があった。表現の自由に対する政治の介入に作家たちが激しく抗議し、マスコミでも大きく取り上げられる事態となったが、結局受賞は見送られた。作品にみられる強烈な風刺や毎回変わる作風から、ヴァイド氏が評価を気にしない挑戦的な作家であることは知られていた。性描写がタブー視されるヒンディー文学において、官能的な描写は氏の作品の特色のひとつである。女性の貞節に対するインドの伝統的な考え方に一石を投じた「菩薩の女房」[iii]のような作品からも氏が女性の人権側にたっていることは明らかであるが、不当な評価によってその作

品が猥褻や女性蔑視といった文脈で語られるようになったことは残念でならない。この事件ののちに氏は地方の文学賞を受賞したのだったが、いずれにしても、無冠のヒンディー作家のレッテルを張られることになった。

その後は心臓病の治療のためインドを離れ、アメリカに暮らす娘さんの元で暮らすことになった。アメリカで教育を受けた３人の娘さんたちはインドに戻ることなくアメリカで活躍している。それからはデリーで会うことはなくなったが、いつも「何しているの？」から始まる短いメールを 1 年に数回ヴァイド氏から送ってくださった。東日本大震災が起こったときにはとても心配してくださり、その日に電話があった。シカゴ大学の大学院生で孫のアルカさんが日本で開催された学会に参加するときに我家に立ち寄ってくれたこともあった。その日はちょうどボブ・ディランのノーベル文学賞の受賞が発表されこともあり、歌手がもらえるくらいならヴァイド氏ももらえるだろうと言って大笑いした。2017 年にチャンパー夫人が亡くなってからは、メールのなかでも寂しいと書かれることが増えて体調も次第に衰えていったが、亡くなる１年前まではメールのやりとりがつづいた。しばらく便りがないことに不安になって書いたメールには、英語の返信があった。それは、目が悪くなりメールを書くことのできなくなったヴァイド氏に代わって娘さんが代筆したものだった。それが最後だった。

印パ独立で難民となって現在のパキスタンからインドに移り住んだ幼少期から、アメリカで英文学を学び大学で教鞭に立った時代、インドに戻り大学教授と作家として生きた時代、最期はアメリカで９３歳で亡くなるまでの長い人生は、まさに波乱万丈であった。一足先にこの世を去ったクリシュナー・ソーブティーとともに、印パ独立を経験してそれを作品に描いた作家がこの世からいなくなったことは、ヒンディー文学におけるひとつの時代の終焉といえるだろう。作風は挑発的で、前衛的であり、ヒンディー文学では異色の作家であったが、私の知るその人となりは穏やかでいつも優しさにあふれていた。

---

[i] この会は音声収録され、”Meet the Author: Shri Krishna Baldev Vaid”のタイトルで Archive.org にて公開されている。

https://archive.org/details/dni.ncaa.SAK-345_1-AC

https://archive.org/details/dni.ncaa.SAK-345_2-AC

[ii] *उसका बचपन* は邦題『ビールーの少年時代』として大同生命国際文化基金から 2006 年に出版されたのち、同協会によって電子書籍化され、無料公開されている。

https://www.daido-life-fd.or.jp/business/publication/ebook/

[iii]「菩薩の女房」の日本語翻訳は、大阪大学のアーカイブ OUKA の以下のサイトで公開されている。

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/26964/Hindi4_5.pdf

ヴァイド氏とチャンパー夫人
（ヴァサント・ヴィハールの自宅にて、2006 年 1 月）